

ロンボック島におけるゴング工房と楽器商¹

梅田 英春

はじめに

インドネシア、ロンボック島はバリ島の東隣に位置し、面積は4,725平方キロメートル(バリ島は5,780平方キロメートル)で、人口は約320万人(バリ島は約389万人)²で、行政的には西ヌサトゥンガラ州に属す一島で、州都はこの島の西部に位置するマタラムである。

民族的にはササク人の居住地域であったが、18世紀にはバリ東部のカラングアスムの王朝がロンボック島西部を支配し、多くのバリ人が移住しただけでなく、またササク人もバリに居住することとなり、2島間ではさまざまな交流、流通が行われるようになった。その後、ロンボックのバリ王朝は、1894年にオランダ植民地政府との武力衝突により滅ぼされてしまいバリ人による政治的な支配は終わりを告げたが、現在でもロンボック西部には多くのバリ人が居住し、ヒンドゥー文化もみられる一方で、東部はササクの人々が多いため、文化的にみると、バリ文化の影響が強いロンボック西部と、ササク文化が色濃い東部とに大きく分けられる³。

バリ島の東隣にありながら、ロンボック島の音楽文化についてはこれまでほとんど紹介されなかったが、この島にはさまざまな編成の楽器アンサンブルが見られゴングを含むアンサンブルも数多い(Harnish 1986:18, Singian 2004:136)。しかしその音楽や楽器についての研究はほとんどなく、ゼーバスらによって行われたいくつかの編成を概観した研究(Seebass et al. 1976)のほか、ゼーバスらによって行われた録音をレコード化した解説(Seebass [1975])、その他、ロンボック島の音楽研究者であるハーニッシュの文献(Harnish 1986, 1997, 1998)に見られるだけである。

本稿は、このロンボック島の音楽で用いられるさまざまなゴングに注目し、2012年から続けている現地調査にもとづき、これまで知られていなかったゴ

ング製作を行っている工房⁴と、金属部分は購入して調律や楽器の台や枠などを自ら製作して販売する楽器商の存在を明らかにしていきたい。

1、ロンボックにおけるゴングの概観

ハーニッシュによると、ロンボックの人々は観念的に楽器を「青銅を使用するもの」と「青銅を使用しないもの」に大別するという(Harnish 1998 : 766)。前者はジャワやバリの文化との関係がある楽器、あるいはイスラム以前のササク文化の楽器と考えられ、後者は現代のササク人のアイデンティティやイスラムの価値観と結び付けられ、イスラムの指導者によっては、青銅の楽器を使う音楽を「バリの楽器、異教の楽器」として禁じたという。その理由は青銅が祖先崇拜と関わることにあり、イスラムと祖先崇拜の混淆した宗教の中で用いられていたからである。しかし1990年代になるとイスラム指導者たちは、青銅楽器がイスラム以前のササク文化的アイデンティティと結びつくことと理解するようになり、そうした伝統を受け入れるようになってきた(Harnish 1998 : 766)。

ロンボックにおけるゴングは、バリと同様に垂直型(吊り下げ型)のものと、水平型のものに分けられる。垂直型のゴングは、コロトミー楽器としての役割を担う一方、水平型の楽器は、主に旋律楽器として役割をもっている。青銅製の楽器が用いられるアンサンブルでは、ほぼコロトミー楽器として垂直型ゴングが用いられ、そのゴング直径は50cmから75cmであり、バリやジャワの大型のゴングと比較するとやや小型である。名称は単に「ゴング」とよばれ、大型のものは、ゴング・アグン gong agung、ゴング・ブレッ gong beleq、コル col、チル cilなどと呼ばれる。ゴングよりやや小型の垂直型ゴングは、クンプル kempul、ゴング・コドゥッ gong kodeqとよばれ、ゴングよりも用いられる編成は多い。一方、水平型のゴングは、音階を持つレオン reong、拍節楽器としてのクルンタン klentang、プトゥック petukが用いられる。

以下は、ロンボックの編成に用いられるゴングの種類を表をハーニッシュの研究(1986)に基づいてまとめたものである。

編成別に用いられるゴングの種類

編成名	ゴング	クンプル	クモン	プトック	クルンタン	レオン
オンチェル	○	○	-	-	-	○
タワタワ	○	○	-	-	-	○
ワヤン・ササク	-	○	-	○	○	-
ゴング・ササク	○	○	○	-	-	○
カンブット	-	○(稀)	-	-	-	-
ブレレット	-	○	-	-	-	-
クルンタン	-	○	-	○	○	-

○は使用、-は不使用

2、ゴングの製作

現在、ロンボック島でゴングを製作している場所は3カ所で2カ所は青銅のゴングの製作、1ヶ所は鉄製のゴングの製作を行っている。なおゴング製作者はバリ島と同様にパンデ・ゴング *pande gong* とよばれる。

(1) 中部ロンボック島の青銅ゴング工房⁵

ロンボックでもっとも古くからゴングを製作している工房は、中部ロンボック県コパン *Kopan* 郡プンダム *Pemdam* 村クアンサンピ *Keangsanpi* 集落に工房を持つアウルディン *Selam Alias H. Awaludin* (1942-)である。この工房の5代目の主人であり、初代はコパンでゴングを製作していたバリ人のもとで修業し、クアンサンピ集落に工房を建てた。現在、コパンにあったとされるバリ人のゴング工房は存在しない。この工房ではゴングとクンプル以外のゴング類、また青銅製の鍵盤を製作している。アウルディンは親方であり作業にも積極的に関わるが、4、5人の従業員がゴング製作に従事している(写真1)。ただし、仕事が年間を通してあるわけではなく、タバコ農家と兼業により生計をたてており、タバコの刈り入れの季節(6月中旬から8月終わりまで)はほとんどゴング製作作業を行わないという。製作を依頼するのはすべてイスラムの人々(ササク人)であり、バリ人が楽器の依頼に来ることはないという。

現在製作するガムラン編成の大半はグندان・ブレッ *gendang beleq* (写真2、3)(別名：オンチェル *oncer*)であることから、家の前の看板には「伝統芸術グندان・ブレッ 売買および修理」という看板が出ている(写真4)。

この作業場(炉が設置されている建物)には、女性が入ることは禁じられている。かつては女性が炉を見ることも近づくことも許されずに、万一、そのような状況が起きた時には、作っている楽器が壊れるなどの伝承があり、さらには場の浄化のために数多くの供物が必要(たとえばヤギの足)だったという。こうした点は、イスラムの信仰ではなく、ロンボックの土着信仰と深く結びついていると考えられる。またこの禁忌は現在のバリには見られない。

炉のある作業場の様子は、ジャワやバリと大きくかわらないが、鍛造する者がひざ上程度の溝におりて作業する構造は、バリの作業場の構造と同じであり、溝を掘らないジャワの工房とは異なっている。この点は、バリからゴング作りが伝承されたことと関係があると思われる。

(2) 東部ロンボック県の青銅ゴング工房⁶

もう一つの青銅製のゴング製造は、東ロンボック県マスバギッグ Masbagik 郡クシク Kesik 村スリムル Selimur 集落に工房をもつヌガ・シント Nengah Sinta (1956-) (イスラム名：Pak Han) により行われている。彼はバリ人であり、バリ島のゴング製作で有名なティヒンガン Tihingan 村出身でパンデである祖父がロンボックに移住し、ここに工房を持った。シントの父親まではヒンドゥー教を信仰していたが、シントはすでにイスラムに改宗してイスラム名を持っている。改宗についてはイスラムを信仰するササク人の妻を娶ったという信仰上の理由を第一にあげたが、ロンボックのイスラムの人々との商売にとっても宗教は無関係でないと述べている。

この工房では、中部ロンボック県同様に、ゴング、クンプルを除いたゴング類すべての楽器を作っているが(写真5)、製作の一方で、バリから楽器を取り寄せて販売する楽器商も兼ねている。このようにバリから楽器を取り寄せる販売方法はこの工房が始まったときから行われており、急ぎの場合で工房での作業が間に合わない場合、あるいは依頼者がバリの楽器をあえて望む場合は、シントの親族であるティヒンガン村のパンデに製作を依頼し、楽器を送ってもらってそれを販売している。依頼先のバリの楽器工房にはプトゥディン petuding とよばれる竹製の音叉を数種類預けてあり、それに合わせて製作するのだという。楽器を依頼するのはバリ人、ササク人の両方であり、ササク人の場合

は、フローレス島やティモール島などに多い移民集落からも注文があるという。

この工房は前述した中部ロンボック県の工房と同様に女性が作業場に入るとは許されないが、それに加えて、作業中に限っては覗くことも固く禁止されている。この禁忌は先に述べた中部ロンボック県の事例よりも厳しく、今でもこの禁忌は厳格に維持されている。

(3) 東部ロンボック県の鉄ゴング工房⁷

鉄のゴングは、東ロンボック県マスバギグ Masbagik 郡クンバン Kembang 村バンケット・ダヤ Banket Daya 集落にあるアマツ・ヘル Amaq Her (1962-)の工房で製作されている。この集落には鉄鍛冶が多く、今なおさまざまな農具をはじめ、鍋、釜などの台所用品などを製作している。1987年に現在の主人であるヘルの子が父親が鉄製のゴングを試作し、1991年から本格的に鉄製のゴング製作職人として仕事を始め、今ではゴング製作とゴング調律師などで生計を立てている。

本来、ロンボックで用いられてきたゴングは青銅製だったが、現在では新たに作られるゴングはほぼ鉄製であり、ロンボックには以前からここにしか鉄製ゴングの工房がないことを考えると、この工房が誕生した1980年代後半から鉄製ゴングの需要が増加し始めたともいえる。この鉄製ゴングの注文の増加は、ロンボックの文化政策と関係している。なぜなら州政府主催により2001年から、グندان・ブレッのコンクールなどが始まり、各地、各学校単位で楽器を注文したことから、ひじょうに多くの鉄製ゴングが製作されたという。現在では新たな注文は月に3、4台だといひ、注文のないときは鉄製の鍵盤楽器なども製作するという。

バリでもロンボックでも鉄のゴングを作る職人のことはパンデ・ブシ pande besi と呼ばれているが、実際の作業では炉を用いることなく、火も溶接するバーナーを用いるのみである。製作方法は、厚さ2.5ミリ(縦1メートル、横1.5メートルほど)の新しい鉄板を購入して切り取り、工具を使用して手作業でたたいてゴングのこぶの形を打ち出し、縁の部分は溶接により接合されている。(写真6、写真7)

鉄製ゴングの価格は青銅製のゴングと比較すると9分の1程度であり、破損

した場合もこの工房で修理が可能であることから、現在ではロンボックのバリ集落を除けば、大型のゴング、クンプルに限っていえばその大半が鉄製であり、青銅製のものを新たに購入することはなく、この工房がロンボックで用いられる鉄製ゴングの製造を一手に担っている。

3. ゴングを商う楽器商

前述したように中部ロンボック県には古くからササク人のパンデ・ゴングがいたが、特に西部ロンボックに点在するバリ集落のヒンドゥーの人々はイスラムのパンデから楽器を購入することなく、バリで直接購入するか、バリから定期的にやってくるゴングの御用聞き(たいていはパンデ自身がロンボックに来て、バリ人集落を回り、注文をとったり、修理を行っていた)から購入していた。しかし、1950年代初頭、西ロンボック県のマタラム市内に在住するバリ人の王族の一人イ・グスティ・マデ・パジャン I Gusti Made Pajang (1928—)はバリからやってくるパンデを自宅に滞在させ、その代わりに共鳴等の作り方、調律法などを学び、1956年からは楽器の青銅部分をバリから購入して、枠や台は自分で製作し完成品の楽器を販売するスタイルの楽器商を始める(写真8)。杉山は、バリの楽器商を「生産者から楽器の各パーツを購入し、保管、販売、輸送などの流通活動を担う事業者としての性格と、楽器の各パーツを吟味し、組立て、整音まで行うコーディネーターとしての性格を兼ね備えている」としているが(杉山 2012 : 30)、ロンボックの場合もバリの楽器商とその役割は同様である。ただ過去には楽器のパーツである青銅部分をバリから購入するだけでなく、家の敷地内に炉を作りバリからパンデを呼び寄せ、青銅部分だけを作らせていたことから、この点は、バリからロンボックへの輸送が簡単ではなかった時代のロンボックの楽器商の特徴といえる。また杉山の研究からバリの楽器商の出現は1980年代であるが、ロンボックの場合はずでに1950年代から存在し、ロンボックの楽器流通においては古くから重要な存在であることがわかる。

パジャンは今なおバリのパンデとしか付き合いがなく、鉄製の楽器は一切扱わない。またこの家で働いていた人々が独立し、今では多くの楽器商がマタラム周辺にいるが、このパジャンが最も早く楽器商を始めた人物だとされている

(写真9)。

パジャンのもとで楽器商の仕事を手伝っていたバリ人のイ・コマン・カントウン I Komang Kantoun (1954-)もロンボックでは有名な楽器商である。西ロンボック州のバリ人集落として知られるグヌンサリ Guning Sari 郡タマン・サリ Taman Sari 村ルンダン・バジュール Rendang Bajur 集落に住むカントウンは、すぐれた演奏者である一方、州立の芸術センターに勤める公務員を経験し、各地を仕事で回ったことからロンボック各地のさまざまな音楽について造詣が深く、また音楽家とも親交がある。公務員時代には仕事の後に、楽器商のパジャンの家で楽器の調律を習い、パジャンの販売する楽器の製作にも関わった。その後、1980年代後半から独立してタマン・サリ村の自宅で、パジャンと同様に青銅部分だけを仕入れ、あとは自身で楽器を作り販売するようになる。彼はパジャンと違って演奏者であることから、「芸術家楽器商」¹⁰に位置付けられ、演奏者間のつながりから多くの顧客を持ち、当初は青銅部分はマタラムのパジャン工房から購入していたが、その後、1990年代には楽器の価格を下げるために自身でバリのティヒンガン村の工房を訪ねて注文先を開拓し、現在ではティヒンガンの複数の工房と契約関係があり、数多くの楽器を購入している(写真10)。

4. おわりに

本調査報告では、これまで全く知られていなかったバリ島の東隣のロンボック島のゴング製作工房およびゴング工房と金属部分を仕入れて楽器として完成させて販売する楽器商の存在について明らかにした。

ゴングの工房は、3つあるがそれぞれが特徴を持っていることがわかる。中部ロンボック県のゴング工房のパンデはササク人であるために、イスラムの人たちがゴングを注文し、バリのティヒンガンとの関係はなく、すべて自身で製作して販売している。この点からロンボックのバリ人のコミュニティーとは全く関係が見られない。その一方で、東ロンボック県のゴング工房は、バリ人でありながら、イスラムに改宗していることから、バリ人だけでなく、ロンボック人もまた顧客であり、バリのゴング製作の中心であるティヒンガン村の親族であることから、製作するだけでなく、バリから楽器を仕入れ、調律して販売

するという製作者と楽器商を併せ持った形態が特徴的である。このようにロンボックのゴング製作は、ゴング職人の信仰がゴングの受注と無関係でないことがわかる。また東ロンボック県の鉄のゴング工房はまだ歴史が浅いが、急速に鉄のゴングのシェアが伸びたことから、急成長した工房であることがわかる。現在、バリ人の集落を除く、ロンボックで使われるほとんどのゴング、クンプルが鉄のゴングであることから明らかである。

こうしたパンデとよばれるゴング製作者が存在する一方で、バリから青銅部分のみを購入して、楽器として完成させてから販売する楽器商が1950年代から存在することが明らかになった。今では例にあげた2つの楽器商以外にも複数の楽器商がマタラム周辺に存在している。

ゴングはロンボックの音楽にとっても重要な楽器であるが、バリ人集落、ロンボック人集落が複雑に入り組んでいるこの島において、バリ人はバリの楽器を手に入れるために、以前から「バリ」との関係の中でゴングを入手してきた。この「バリ」とは、バリ島から持ち込むもの、持ち込まれるものだけでなく、ロンボックにおいて、東ロンボック州に住むバリ人のパンデが製作する楽器も含んでいる。この文脈の中で、楽器商は当初はバリに住むパンデとバリ人のコミュニティを媒介する役割を果たしてきたが、今では、バリのパンデとバリ人だけでなく、ササク人のコミュニティとの媒介も果たすようになっている。一方、ロンボック人は、鉄ゴングはすべて東ロンボック県の鉄ゴング工房から購入する一方で、青銅ゴングについては、ロンボックに住むパンデからも、バリ人の楽器商からも楽器を購入している。この理由はむしろ、「民族」ではなく、「楽器の質」を重要視しているからである。ロンボックの人々がいうには、ロンボックで製作する楽器よりもバリで作られる楽器は上質なのであり、価格が高くてその音にこだわる結果、バリから購入することに繋がっている。

本調査はロンボックのゴング研究にとって出発点であり、今後は、バリの研究成果との比較からロンボックのゴング製作や楽器商の特徴などを明らかにしていく必要があるだろう。

注

1. 本研究は日本学術振興会科学研究費による研究「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究（基盤研究（B）」（2012-2014年、研究代表者：福岡正太）

の一部として行われた。

2. 2011年の統計にもとづく。
3. ロンボックでは、ヒンドゥー、イスラム、アニミズム、仏教などの混淆宗教を信仰している集団のことをウトゥ・トゥル Wetu Telu、現在のイスラムを信仰するササク族の多くの集団をワクトゥ・リマ Waktu Lima とよぶ。
4. ロンボックのゴング工房に関しては、新聞記事として“Pembuat Gamelan Dilarang Batuk” Kompas, 07/Juli/2000, が掲載されている。
5. 2012年9月9日、2013年2月10日、2月11日に工房の調査、製作者とのインタビューを行う。
6. 2013年2月10日に工房の調査、製作者とのインタビューを行う。
7. 2013年8月31日に工房の調査、製作者とのインタビューを行う。
8. ハーニッシュはフェスティバルにおいてこのガムランが最初に紹介されたのは1997年だと述べている (Harnish 2006:157)。
9. 現在ではラトゥ・パジャン Ratu Pajang と呼ばれている。
10. 杉山は芸術家楽器商を「新たな楽器の需要にともなう楽器のさらなる増加によって、都市部周辺に出現した演奏家や芸術教育者の顔を持ち合わせた楽器商」と定義している (杉山 2012: 30)。



(写真1) アワルディンの工房



(写真2) グンダン・ブレッのレオン



(写真3) グンダン・ブレッの鉄製ゴング



(写真4) アワルディンの工房の看板



(写真5) シンタの工房



(写真6) 鉄板からゴング面を
切り抜いたもの



(写真7) 鉄のゴング
(縁の部分に溶接の跡がみられる)



(写真8) 楽器商で製作された楽器の
台跡が見られる



(写真9) 楽器商パジャン(85歳)



(写真10) カントゥンの家のゴングの
ストック

【参考文献】

- Harnish, David, 1986, "Sasak Music in Lombok," *Balungan* 2(3):17-22.
1997, "Balinese Music of Lombok", *Bali: Balinese Music in Lombok*
(Disc Note), Auvidis Unesco Collection, (D272).

- 1998, “Nusa Tenggara Barat”, *Southeast Asia (The Garland Encyclopedia of World Music, Volume 4)*, New York and London: Garland Publishing, pp. 762–785.
- 2006, *Bridge to the Ancestors: Music Myth, and Cultural Politics at an Indonesian Festival*, Honolulu: University of Hawai’ I Press.
- Seebaass, Tilman, [1975], “Panji in Lombok I: A Crossection of the Instrumental Music”, *An Anthology of South–East Asian Music: Panji in Lombok I (Disc Note)*, Musicaphon(BM 30 SL 2560)
- Seebaass, Tilman at al., 1976, *The Music of Lombok: A First Survey*, Bern: Francke Verlag.
- Siagian, Esther L., 2004, *Gong*, Jakarta: Lembaga Pendidikan Seni Nusantara.
- 杉山昌子 2012 「バリ島ティヒンガン村におけるガムラン鍛冶の変容——楽器の流通の視点から」『東洋音楽研究』77: 20–38。

(うめだ ひではる)